中東問題と石油危機の背景

―文明の邂逅接触としてのイスラム問題―

駒井四郎

はじめに

アラー・アクバル(Allahu Akbar)〝アラーは偉大なり〟という、アラビヤ語の敬虔な宗教的祈りが、政治的なjihad(ジハード)(聖戦)の叫びに転嫁され、その言葉がイラン革命の重要な支えとなったという中東における現実は、政治と宗教を分離するという近代西洋文明の洗礼を受けた我々にとっては全く異質であり、むしろ脅威とさえ感じられるのである。

今や中東世界は石油問題とも関連して、イラン革命とその余波としてのイラン学生によるアメリカ大使館占拠と人質の抑留及びその釈放問題、全イスラム教徒の聖地メッカのアル・ハラム寺院における武装したイスラム伝統主義者の襲撃、ソ連のアフガニスタンへの軍事介入とイスラムゲリラを中心とするイスラム教徒の根強い抵抗及びそれに伴うイスラム緊急外相会議の開催、更には最近のイランとイラクの軍事衝突と連鎖的な一連の事件の発生によって、世界の注目を集めている。

昨年の十一月二十六日のタイム誌は、イラン問題の特集号を出しているが、そのなかに「殉教のイデオロギー」(An Ideology of Martydom)なる一文を掲載している。そこに述べられているように、イラン革命の中心となったホメイニ師(Ayatollah Ruhollah Khomeini)のイラン国民に聖戦のための殉教を訴え、イラン学生の人質抑留を支持するという発言は、西欧世界の個人主義的な人権思想及び現在の国際法の通念に馴らされている我々にとっては、理解することが困難であり、ホメイニ師の行動は、あたかも突然他界から復活してきたドンキ・ホーテー的人物の行為として我々の目に映ずるのである。

我々はこのように中東世界に目まぐるしく発生している一連のセンセショナルな事件に目を奪われているのであるが、そうした現象的な表面にあらわれている事件の下に、我々が気づかないが地下水の如くに歴史を通じて滔々と流れている何かがあるのではないかと

目次

はじめに
一、石油危機のもたらしたもの
二、西洋文明に対するイスラム文明の応戦
三、応戦の仕方としてのゼロットとヘロディアン流儀
四、トインビーの史的考察とイランを中心とする中東の状況
五、イラン革命の今後と中東世界
六、汎イスラム主義運動の問題

イラン・イラク戦争の勃発によって、再び世界の注目は石油問題とも関連して中東世界に注がれている。

OPECによる石油値上げ、イラン革命と人質問題、ソ連のアフガニスタン侵攻、イラン・イラク戦争の勃発等世界を揺り動かしている震源地はまさに中東であるといってもよい。

こうした中東の問題を理解するために、トインビーの歴史観の角度から一連の事件にスポット・ライトをあててみた。

いう疑問を持たざるを得なかったのである。そうした問題意識からすぐれた歴史家であり文明批評家でもあるトインビー（Arnold J. Toynbee）の歴史観の基礎をなしている〝文明の邂逅接触〟（Encounter between Civilization）あるいは〝ある文明の他の文明に対する挑戦の際の応戦の仕方〟としての、ゼロット流儀（Jelotism）とヘロディアン流儀（Herodianism）という発想法のパターンは、現在の中東問題をよりよく理解する上で一つの鍵になるのでないかと考えたのである。

一、石油危機のもたらしたもの

現在、西洋世界の経済構造さらには社会構造そのものをゆさぶっているものは、石油であるといっても過言でないであろう。今や世界の注目は、石油危機という問題意識から中東に向けられているが、日本も第一次の石油危機を通じて、後れ馳せながら中東について多くの事を学びつつあるのである。本年一月八日の朝日イブニングニュースの社説は「もう一つの世界」と題して中東問題について論じているが、その中で「現在日本は、世界の大国と称せられているアメリカ、ソヴェート、欧州諸国と同様に、石油資源という問題から中東に目を向けざるを得なくなっている。今や一九八〇年代の世界の舞台に登場して来た主役は中東であって、それはもう一つの世界地図があることを我々に示すものである」と述べている。

最近まで中東世界は、地理的に遠く離れているとともに、宗教、慣習、風俗といった文化的側面においても異質なために、中東問題を理解することが容易でなかった。世界には中東を中心として約八億のイスラム教徒が現に存在し、彼等の多くが毎日五回イスラム教のメッカ（Mecca）に向って礼拝し、断食し、アルコールを禁じているということを知る時に、何か「不思議の国」の話を聞いているようにさえ感ずるのである。我々日本人がまだ一度も直接に邂逅接触したことのないイスラム教世界あるいはイスラム文明は、異なった世界のものであり、ましてイスラム教諸国における宗教が、その国民の政治的、経済的生活に重大なしかも広汎な影響を現実的に及ぼしていることは驚異に他ならない。

カール・マルクスは〝宗教はアヘンである〟という有名な命題を提起したが、もし政治から宗教を分離することが近代化の出発点であるとするなれば、イランにおける現在の状況はナイーブであり、中世的であるといわざるをえないのである。本年二月九日のイラン革命一週年記念日にあたって、イランの駐日大使ガアゼム・サレクハウ氏（Ghassem Salekhou）は、日本国民へのメッセージにおいて「西洋文化の退廃的要素―それは西洋文明と呼ばれているが―は、イラン社会の中に深く浸透し、それによって汚職、背信、階級的特権の種を育てると同様に、麻薬中毒、売春を促進した」と述べて西洋文明を手厳しく批判しているが、それはメッセージというよりもむしろ西洋文明に対する怨念としての応戦とも聞えるのである。

二、西洋文明に対するイスラム文明の応戦

イラン大使の発言は、ホメイニ師を中心とするイラン政府当局の考えでもあるが、石油危機としての経済問題としての角度からイラン問題を取り上げることに馴らされてきた我々にとっては、大使の

発言は奇異にひびくのである。しかし現在の石油問題を初めとする中東問題は、前にも述べたようにその根底にはイスラム文明の西洋文明に対する激しい応戦が始まっていることを示すものである。大使はまたイラン革命は、階級のない神聖イスラム共和国を建設せんとするもので、資本主義あるいは社会主義の原理に基礎づけられた凡ての西洋流のユートピアによるものでないとさえ言っている。その意味において石油は、西洋文明に対する応戦の一つの武器として使用されているといっても間違いはないであろう。したがって一九八〇年代の世界の舞台に登場する主役としての中東世界に発生している問題をより正しく理解するためには、文明史論の立場から見直す必要があるのではなかろうか。

私は人類歴史の見方について、トインビーから多くのことを教えられたのであるが、最近彼が今から約五十年近くも以前に「イスラム、西洋と未来」(Islam, the West, and the Future) と題する論文を書いているのを発見して、非常に興味深く読んだのである。ある意味において、トインビーはすでに半世紀も前に、今日の中東に発生している事態を彼の文明史論の立場から洞察していたともいえる。彼はその論文で、西洋文明とイスラム文明が過去において幾度か邂逅接触した歴史的事実を述べ、そこから将来起こり得るものとして、「汎イスラム主義 (Pan-Islamism) は眠っているが、尚も我々は、もしも西洋化された世界のコスモポリタン・プロレタリアート (the cosmopolitan proletariat)[1] が、西洋の支配に対して反乱し、反西洋支配を叫ぶなれば、眠っている者（イスラム）が目を醒すという可能性を考慮に入れなければならない。そうした叫びは、イスラムの過激的精神を呼び起すことにおいて、計り知れない心理的影響をもつのである。すなわち七人の眠れる者 (the Seven Sleepers)[2] の如く永く眠っているとしても、その呼びかけは英雄的時代の反響を目醒めせしめるからである」と述べている。トインビーによれば、現在の中東問題は彼の文明史論の立場からすれば当然起るべくして起ったものであり、眠れるイスラムの過激精神が目醒めて、西洋文明に真正面から応戦しているのである。

註① the cosmopolitan proletariat という言葉であるが、トインビーはこれに独自の意味をもたせている。プロレタリアートという言葉は、最初マルクスが産業革命以降における西洋社会に発生した新しい階級としての産業労働者を意味して用いたものである。そしてそれは資本主義社会の重圧下にあってみじめな生活条件のもとに虐げられた階級を意味していた。

しかしトインビーはプロレタリアートという言葉を、マルクス流の意味も含めているが、さらに他の意味をも含めて使用している。すなわちトインビーによれば、その社会の成員でありながら、その社会の成員としての権利から締め出されている人あるいは疎外されている人をも含めている。

日本においては、徳川末期になると理論的にいって権力から除外された階級であって、しかも大多数の大名や武士よりもはるかに富裕な町人が沢山あらわれている。トインビーの言葉からすれば、その時代の富裕な町人もプロレタリアートに属するのである。

現在の国際政治の観点からいえば、南北問題として国際的に

取り上げられている、いわゆる第三世界と称せられる発展途上国は、そうした意味でコスモポリタン・プロレタリアートと呼ぶことが出来るであろう。トインビーは同じ意味で the International proletariat という表現も用いている。

註② the Seven Sleepers とは、デシウス（A.D. 249-251）の迫害のもとに、エペサス近くの洞窟のなかにかくれ、深い眠りに落ち入り、キリスト教がローマ帝国の宗教になった二〇〇年あるいは三〇〇年後まで目醒めなかったといわれる七人のキリスト教の若者の物語を指すものである。

三、応戦の仕方としてのゼロットとヘロディアンの流儀

トインビーは、文明の邂逅接触の際の挑戦者と応戦者の立場は、不平等であるとしている。エジプトとスメルの古代においてもそうであったように、現代においても両者の関係は能動的な側と受動的な側、あたえる側と受け取る側あるいは侵略者と被侵略者に分かれている。そして受け取る側の反応の仕方としては、消極型と積極型がある。トインビーは、前者をゼロット流儀（Zealotism）、後者をヘロディアン流儀（Herodianism）[1]と呼んでいる。

トインビーがこの名称を使ったのは、聖書の物語にあるように、ユダヤ的な生き方がギリシャ的な生き方と出会ったときに、ユダヤ教の熱狂的信者であったゼロット（Zealots）は、ギリシャ文明に対して徹底的に反抗し、自分達が神に忠実であれば、神は自分達に味方し、破滅から救ってくれるという信念をもって、ユダヤ教の伝統的生き方の中に閉じこもり、祖先伝来の掟を一字一画にいたるまで遵奉することによって、自分達の文明を護り抜こうとしたのである。トインビーは日本についていえば、一六三〇年代から一八六〇年代の鎖国時代は、ゼロット主義のよい例だとしている。

ゼロットに対してヘロディアン（Herodians）は、侵入してきた異域文明のもつ武器をわがものとし、その借りものの武器を本来の発明者であり、所有者でもあるものから自分を護るために使用することによって、その侵入文明に応戦せんとするもので、ユダヤのヘロデ王がとった流儀である。日本においては、明治維新の指導者がとった「和魂洋才」という対応の仕方に似ている。トインビーは、両者の侵入文明に対する応戦の仕方として「ゼロットは、駝鳥が追手から隠れるためにその頭を砂の中に埋めるように、過去の中に隠れんとするものであり、ヘロディアンは、勇敢に現実に対面して未来を開拓せんとするものである」と述べている。言いかえるなれば、ゼロットは本能的衝動によって行動し、ヘロディアンは理性によって打算的に行動するものである。トインビーは、日本はゼロット流儀の応戦として完璧とも考えられる鎖国という方法をとったのであるが、ゼロット的応戦に固執することは、彼等を破滅に導びくものであることを自覚したのであった。そして幕末から明治の初めにかけて、当時の日本が当面する西洋文明の挑戦による厳しい状況の中にあって、開国というヘロディアン路線に転換したのであったとしている。

さてトインビーが両者の流儀の長短について述べているのを要約してみたい。彼によるとゼロット流儀の反応は、一時的には外見的に有効であるかのように見えるかも知れないが、少なくとも長い目

で見た場合には失敗である。なぜならばゼロットが忠誠を誓っている祖先伝来の生き方は、挑戦者側の文明の生き方に比較して、非合理的で能率が劣っているからである。もしもゼロット側自身の生き方が、能率が低くなく勝れているとすれば、ゼロットが守勢に追い込まれたりしなかったはずである。それに反してヘロディアン流儀の応戦は、有効であって彼等を没落の運命から救うであろう。しかしヘロディアン流儀の応戦が落ち入り易い欠陥があることもまた事実である。それはトインビーが名づける「いもづる的現象」によって、ヘロディアンは侵略者文明の中にずるずると引き込まれ、埋没し、ついには有効な応戦をする主体性を喪失するからである。

註① Zealots は、ユダヤの宗教的政党ともいえる集団であり、この Zealots という名称は、彼等が神の掟に熱心（zeal）であったことから由来している。彼等は神の掟以外の一切の権威を否定し、ユダヤは神による共和国家であるべきだと主張した。そしてローマのユダヤに対する覇権主義を極度に憎み、ユダヤ共和国建設への戦闘的な推進者であったが、熱心のあまり暴力や犯罪行為に落ち入り、彼等の崇高な理想からしばしば逸脱したのであった。

Herodians は、キリストとその使徒達の時代において、ヘロデ王の一家を支持したユダヤ人の一派であった。ヘロディアンはユダヤ教の宗派というよりも、むしろ政党的集団であって、彼等はユダヤ主義についてはゼロットのように厳格でなく、ローマ文明に対しては冷静で打算的であり、キリストが非難したサドカイ人（Sadducess）として、ゼロットとともに聖書に登場する人達である。

四、トインビーの史的考察とイランを中心とする中東の状況

我々は現在のイランを中心とする中東の状況について、トインビーの文明の邂逅接触における応戦の仕方としてのゼロット流儀とヘロディアン流儀のパターンを参考にして考えてみよう。

イランにおける西洋文明の挑戦に対して、パーレビ（Mohammad Reza Pahalavi）国王とその追従者がとった立場は、典型的なヘロディアン流儀であり、他方ホメイニ師と革命評議会がとっている立場は、典型的なゼロット流儀と考えられる。パーレビ国王は、かつて同国を訪れた日本の高官に、日本の明治維新以降における近代化の成功を高く評価したように、彼はアメリカ文明に追従し、石油によって獲得した富によってイランの近代化を急速に進めたのであった。ホメイニ師は、パーレビ国王のアメリカ的近代化路線に強く反発し、革命によってパーレビ国王を打倒し、応戦の方法としてイスラム教の伝統に閉じこもり、あたかも近代兵器に対して槍と盾で戦っているともいえよう。それは前にも述べたユダヤのゼロットの対応の仕方と全く同じであって、ユダヤ教にかえてイスラム教をもって、イラン共和国を建設せんとするユダヤのゼロットの現代版ともいえるであろう。

さてゼロットによるイラン革命が、ヘロディアンとしてのパーレビ国王の近代化路線を打倒し、勝利を収めたのは一体何故であろうか。そしてホメイニ師を中心とするイラン革命が今後どのように展開するであろうか。ゼロットよりも西洋文明に対する応戦の仕方と

して、遙かに有効なはずのヘロディアンの敗北としてのイランの現状は、ヘロディアン主義のもつ欠陥から生じたものとしか考えざるを得ないのである。トインビーは、ヘロディアン流儀が陥り易い欠点を比喩をもって説明している。それはあたかも激流を横ぎるために伝統主義という馬を捨て、ヘロディアンという馬に乗り替えた騎手が、彼の乗る新しい馬の鞍を発見することができなくて、流れに押し流され溺死するということである。それは諺にもあるように、ミイラとりがミイラになり、薬も使用を誤れば毒となるということである。トインビーはそれについて「ある制度は、その生まれた社会の文化事情や環境のなかでは自然なものであり、無害なものであっても、それがその親としての社会から引き離されて、異域の文化事情や環境のもとに移植された場合は、不自然で有害なものになるかも知れない」と述べている。

パーレビ国王のヘロディアンとしてのアメリカをモデルとした近代化は、イランの文化事情や環境を無視して拙速的に強行されたために、都市と農村あるいは国民階層間に歪みと貧富の差を拡大し、そうした矛盾から発生する不満の現われとしての抵抗を、力によって弾圧せんとした失政によって崩壊したのである。伝えられるところによばアフガニスタンの問題も、その根底にはソビエトのマルキシズムによる同国の近代化路線に対する根強いシーヤ派（Shiite）を中心とするイスラム教徒の反発があり、アフガニスタンに隣接する国内のイスラム教徒への影響をソ連が恐れたこともその背景にあるようである。

サウジアラビヤにおいても、イラン革命の影響もあったと考えられるが、かのメッカ事件も同国において進められている近代化路線に対するイスラム過激派によるゼロット的反抗であると考えられる。ロンドンのサンデタイムス紙で、同国の事情に詳しいフランク・ギイレス氏（Frank Giles）は次のように述べている。イランにおいてはその権力がパーレビ国王一人の手に握られていたのに反して、サウジアラビヤにおいては権力が比較的分散されていて、王室は伝統的なイスラム教の理想を高くかかげ、国民に対しても教育費、医療費の無償、住宅ローンに対する低金利といった社会保障的政策を実施し、サウジアラビヤの当局は、同国の近代化路線の成功について相当な自信をもっていた。

しかし昨年の十一月二十日のイスラム暦一四〇〇年の元旦にあたって、聖地メッカのアル・ハラム寺院を襲撃、占拠したイスラム教の過激派と考えられる武装グループは、近代化に伴う同国への西洋文明の流入が、質素で規律ある伝統的イスラム社会を破壊していると警鐘を乱打したのである。彼等は悪しき西洋文明の象徴であるとしてテレビ、ラジオ、サッカーを禁止すること、またイスラムの伝統に反するとして女性の職場進出に反対し、寺院襲撃の武装グループの一人をイスラムが待望するマハデー（mahdi）すなわち救世主（messiah）として認めるように要求した。それは彼等が現在のサウジアラビヤは腐敗し、ただれた末世であり、宗教的世直しのためには救世主の導びきが必要であると考えたのであった。

サウジアラビヤにおいても近代化の進行とともに、今日までこの国を支えてきた血縁と伝統を重ずる部族社会構造が崩壊し、かつては人口の四〇パーセントを占めていたベトウィン（遊牧民）は、今

では僅かに五パーセントにまで激減している。そのことはイスラムのゼロットによると、ベトウィンの青年達が西洋文明の麻薬に毒され、アラーへの祈りと忠誠を忘れ、酒を飲みテレビに親しみ、西洋映画と音楽にうつつをぬかす生活にあこがれることによって、質素と誠実を尊ぶ伝統的部族社会を捨て、都会へと去って行ったためであるとしている。

サウジアラビヤの政府当局者にとっては、今回の聖地メッカ襲撃事件は、彼等が今日まで自信をもって進めてきた近代化路線への反抗であることを知って相当のショックを受けたようである。現在サウジアラビヤの当局者は、イラン革命とメッカ事件の教訓によって近代化路線を再検討することを余儀なくされ、伝統的社会を破壊することなくして西洋文明を如何に吸収するかについて腐心しているようである。最近のニューヨークタイムスによると、サウジアラビヤは国民のコンセンサスを得るためにより開かれた政策を進めることを考えている。すなわち皇太子ファハド（Fahad）は、新聞記者会見において、国民の意見を反映するために新しく内閣の外に協議会議（consulitative council）なる機関を設置すること、新憲法の発布、不法行為を犯した政府高官の更迭等について述べている。

五、イラン革命の今後と中東世界

イラン革命は、前にも述べたようにゼロット派のヘロディアン派に対する勝利として短期的には理解されるが、現在ホメイニ師を中心としてイスラム教のシーア派による神権政治が今後どのように推移するであろうか。イラン革命の一周年にあたってバニサドル（Abolhassan Bani-Sadr）大統領は「米国はイラン革命を全く理解していない。例えば人質事件をイラン人の野蛮さ、狂信的行為と見なしたり、大統領選挙での私の勝利を聖職者に対するフランス式自由主義教育を受けた〝新西欧派〟の勝利と解釈するなどは、いずれも間違っている。そして米大使館占拠とバニサドルの大統領就任は、貨幣の裏表に相当するものであり、独立を求めるイラン国民の願望を表明したものである」といった趣旨の声明を発表している。

しかしバニサドル大統領は、典型的ゼロットと考えられるホメイニ師の親任をえて彼と行動を共にしているが、かつての革命評議会内の強行派やアメリカ大使館占拠の過激派学生とは異なった対応の仕方をしようとしているようである。そのことは彼の人質問題についての発言や同事件解決のために国連事務総長ワルト・ハイム氏との唯一の窓口になっていることによって知ることができる。あるアメリカの政治評論家は、人質問題についての解決にあたっているのは、カーター大統領やバンズ国務長官、ホメイニ師でなくして、バニサドル大統領と国連事務総長であるとさえ論じているほどである。そして今回の大統領選挙の過程において、イスラム共和党からバニサドル氏は、神権政治原則に反対していると批難されたのであった。

ホメイニ師直系を看板にし、各地方の実権を握っているイスラム僧と革命委員会を基盤としたイスラム共和党は、党員二百万人を超える強力な党組織にまで成長しつつあるということであるが、バニサドル氏が大統領選挙においてそうしたイスラム共和党の候補者に打ち勝ち、国民の圧倒的支持を得たのは何を意味するのであろう

か。その理由として考えられることは、イラン国民が革命評議会を中心とするゼロット的神権政治の将来について危惧の念をいだき始めたということでないであろうか。そのことはゼロットの持つ致命的な欠陥ともいえる西洋文明の挑戦に対して有効な応戦ができないということである。イラン問題の識者が指摘するように、革命後のイランの再建についての基本的課題としての政治的、経済的再建への具体的方針が欠けているということである。それがためにイラン革命によるホメイニ師一派の神権政治に対して、イラン国民の間には希望と共にあるいは一歩間違えば、イランが破局の道を辿るのでなかろうかという不安が交錯しているのでなかろうか。

イランにおける現在の体制内における左右の権力闘争が今後どのように発展するかは、予想は極めて困難であるが、国民が政治家としての特に経済の専門家としての彼に期待し、彼を支持する限り現在のゼロットとしての神権政治路線は修正されて行くものと考える。バニサドル大統領が革命評議会の議長となり、また新憲法によってホメイニ師の権限に属する陸・海・空の国軍最高司令官の地位を、ホメイニ師の依嘱によって彼が代行することになったことは、イランにおけるゼロット派の内部においても、修正派としての彼の地位が強化されつつあることを示すものである。

しかし革命後のイランの最初の総選挙において、その議会（majlis）を構成する議員の多数は、イスラム共和党に所属するものによって占められているために、バニサドル大統領が人質問題を初めとする彼の施策を実践に移すことは非常に困難のようである。そのことはラジャイ首相（Mohammad Ali Rajai）を初めとする閣僚の選考過程においても、大統領の意見が議会によって殆んど無視されたことによっても知ることができる。

さらに今回のイランとイラクの領土問題を中心とする争いが、全面戦争状態に発展する可能性を秘めていることを知るとき、イランのゼロット的方向が崩壊するのでないかとの危惧さえ感ずるのである。そのことは前にも述べたように、トインビーが文明史論の立場から歴史的教訓として、ゼロット主義の欠陥について述べているところである。

さて次に中東問題を考える場合に見逃してならないことは、青年層の間にイスラム教の復活としての伝統主義（Fandamentalism）が次第に勢力を得つつあるということである。それはアラブの青年達が、アラブ世界におけるルーツを求め始めているということである。その意味において西洋文明の挑戦を受けてヘロディアンの方向に傾斜していた時計の振り子が、再びゼロットの方向に動き始めているとも言えよう。

ある中東問題の専門家は現在の中東における状況は、一九六〇年代の末に西欧世界を襲った雪だるまのように拡大していったニューレフトとしての学生運動に近いものがあるとさえ述べている。たとえば最近カイロ大学で学生の文化サークルの団体が、音楽会を開催することを決定し、大学当局から講堂の使用許可を得た。この音楽会は西洋のクラシックとイスラム音楽を内容とする極めて上品なものであった。しかしイスラム教のゼロット的伝統派の学生がこのことを聞いて、彼等の抗議集会を持つために、音楽会が開催される前に会場に乱入し、占拠したために音楽会を開催することが不可能に

なった。そこで学長は占拠学生の代表者に退去するように説得したが受入れられないので、彼等を排除するためには警察の力を借りねばならないが、そうすることは事態をより混乱さすことであり、それかといってそのままにしておくことは、音楽を愛好する学生の当然の権利を無視することになるという二者択一のジレンマに苦しんだということである。

また日本の新聞記者が革命後のテヘラン大学に取材に行き、黒いスカーフをつけていない伝統派に属さないと考えられる女子学生に、イラン革命とその後のイランの状況についての意見を求めていると、黒いスカーフ、黒いスーツを着た数人の女子学生が周りを取り囲んだので、その女子学生は逃げるようにしてその場を立去って行った。そして黒スカーフの女子学生はキツィ敵意のある眼差しを新聞記者に向け「今あの学生と何を話していたのか」と詰問したということである。以上のように勿論程度の差はあるにしても、中東の大学には同様の状況が発生していて、大学の学生自治会選挙においても、ゼロット派が次第に勢力を得つつあるということである。

そしてその背景として考えられることは、主なアラブ諸国においては、近年人口の爆発的増加によって、その人口の半数以上は二十歳以下の層によって構成されるという、西洋先進国とは全く逆の現象を呈していることである。その上、青年達は急激に変化する社会状況に適応することができないためにフラストレーションを高め、彼等をゼロット的過激派の行動に導びいているとされている。ホメイニ師の支持もさることながら、一見強力な発言権をもち、頑強に人質解放に抵抗しているイラン過激派学生の行動は、中東におけるヤングパワーの台頭という背景を抜きにしては理解できないのでなかろうか。

六、汎イスラム主義運動の問題

西洋文明に対するイスラム文明の応戦としての汎イスラム主義運動（Pan-Islamic Movement）の問題であるが、同運動が今後文明史論の観点からどのように展開するかということは、我々にとって関心のある問題である。

本年一月二十七日、ソ連のアフガニスタンへの軍事介入によって、その対策を討議するために、その隣国であるパキスタンのイスラマ・バードの旧国会議事堂でイスラム諸国緊急外相会議が、三十七カ国の代表者の出席の下に開催された。同会議は「アフガニスタンに起きたことは、明日にも別の国に起るかも知れない」という危機感から、イスラム諸国の統一と団結の強化が叫ばれ、集団的防衛体制を整えることによって、大国の武力介入に対抗することが確認された。また今年三月八日テヘランで、ホメイニ師を最高指導者と仰ぐイランの学生達は、イスラム解放連帯会議を開催した。この会議にはフィリピンやアフガニスタン、中南米など二十カ国の代表が出席し、「米国やソ連の抑圧に武器をもって抵抗することは、イスラム共同の正義である」という宣言を発表し、イスラムの連帯を誓ったのであった。

このように汎イスラム主義運動としての連帯は、政治面だけでなく、すでに以前から経済面において実施されて来た。石油を武器として連帯せんとするいわゆるＯＰＥＣについては今更論ずるまでも

ないであろう。そして中東産油国が設置している対外援助機関は、多種類に及んでいるが、それらはいずれもイスラム諸国を中心とした発展途上国への援助を目的としたものである。石油収入に恵まれたサウジアラビヤ、クウェート、アラブ首長国連邦にいたっては、その国民総生産（GNP）の一〇パーセントを超える巨大な醵金をしているといわれている。これらの現象は、汎イスラム主義運動の現代版に他ならない。

さて汎イスラム主義運動は、過去においても衝動的、本能的なものとして叫ばれ、その連帯を強めんとする試みは幾度かなされたが、組織的なものとして実践的には大きな力となり得なかった。トインビーは汎イスラム主義運動の困難について「汎イスラム主義運動を実施に移すことの固有の困難は、事実として容易に理解することができる。汎イスラム主義運動は単なる本能の表現である。すなわちそれは平原にちらばって草を喰んでいる野牛の群が、敵がその領域内に現われるや、ただちに頭を下げ、角を突き出し、密集隊型をかたちづくるようなものである。換言すれば汎イスラム主義運動は、この書物でゼロット主義という名前を使用した、優勢な未知の敵に対面した時に伝統的戦術に復帰するという例なのである。それ故に心理的①に汎イスラム主義は、ワッハビ（Wahâbi）やサヌーシー（Sanusi）の傾向において特にイスラムのゼロットに訴えるのである。しかしこの心理的傾向は、技術的困難によってくじかれるのである。何故なれば、イスラムの如くモロッコからフィリピン、それからボルガからザンベジ川へと海外に分散している社会においては、団結の戦術は彼等がたやすく想像する如く実行に移すことが困難なのである」と述べている。トインビーが言っているのは、汎イスラム主義運動は、動物が何らかの危険に当面した時に群居本能的に応戦するが、西洋の優れた科学技術を主体的に利用することに欠けるとともに、イスラムが広い地域に分散しているために有効な対応をすることが困難であるということである。

トインビーのこの汎イスラム主義運動に対する考察は、今から約五十年も前になされたものであり、中東の石油が世界経済に占める比重が相対的に低く、かつその石油が西欧のメジャーの支配下にあった時代のことであった。それ故に汎イスラム主義運動は、世界が中東の彼等の支配下にある石油に大きく依存している現在においては、石油を武器としてより有効に応戦することが出来ることは誰しも認めざるを得ないのである。しかしトインビーの文明の邂逅接触という長期の歴史的展望からすれば、石油資源にも限界があり、それは一時的のものといわざるを得ない。したがってトインビーの指摘した汎イスラム主義運動のもっている固有の困難は、長期的視野からすれば解消されていないといえる。

さらに汎イスラム主義運動の地理的困難さとともに、その内部においてゼロット流儀とヘロディアン流儀があって、対応の仕方に差異があるということである。イスラム問題の専門家であるフロラ・レイヴィス氏（Flora Lewis）は、「イスラム世界における宗教熱は、イラン革命に引続いてイスラムの土地に吹きまくっている。そしてそのイスラム運動の強度とその目標及び戦術は、世界の七億から八億のモスレムの地理的、歴史的なものと同様に異なっている」と述べて汎イスラム主義運動の統一の困難さを指摘している。マホメッ

トは相争うアラビヤの砂漠の部族を救済し、連帯せしめるために国家と宗教をからませてイスラム教を創設した。したがってイスラム教の中にあっても宗教と政治とを切り離す傾向の強いものと、密着さす傾向の強いものがある。私の理解する限りでは、イスラム教のスンニ派（Sunni）は前者であり、シーア派（Shiite）は後者であると考える。イランとイラクの今回の戦争の原因は、歴史的な国境問題及び民族問題が重要な要因をなしているが、その背景にはスンニ派とシーア派のイデオロギー的対立があるのである。すなわちホメイニ師の指導するシーア派のイスラム共和党とフセイン大統領（Saddam Hussein）の指導するスンニ派であるバーズ党との革命理論の相異である。ホメイニ師はイスラム教による神権政治を主張し、フセイン大統領は非宗教的社会主義を主張しているのである。そしてフセイン大統領はイラン革命後、イラン国内でのアラブ系住民への働かけを強め、特に油田地帯のフゼスタンでは反ホメイニ体制の破壊活動を支援し、これに対してホメイニ師はイラク国内のその人口の半数以上を占めているといわれるシーア派に、フセイン体制を打倒するための聖戦を呼びかけたのであった。イラン・イラク戦争を憂慮して目下国連安全保障理事会やイスラム諸国は、両国が直ちに戦争を中止し、話し合いによる解決のための調停に乗り出したが、イラクは停戦のために四つの条件を提起し、イランはイラクの侵略地からの完全撤退を主張しているために早期調停は見込み薄く、両国の戦闘は続きそうである。

以上のように〝眠れるイスラムは目醒めて、西洋文明に対して激しい応戦をするであろう〟というトインビーの卓見は、その歴史観の正しさを証明しているが、しかし汎イスラム主義運動としてイスラム諸国が一致団結することは地理的、イデオロギー的、民族的、内部的条件等によって非常に困難なことを示している。

註① サヌーシー教徒は、北アフリカのサヌーシー教徒とも称せられているが、創始者はアス・サムーシー（as-Samusi 1791-1859）であり、ワッハビーの復古主義と神秘主義を加味した教理を持っている。その信奉者はエジプト、アラビヤ西岸地方、中央アフリカ、スーダンに勢力をもったイスラム教徒であった。

ワッハビーは、中央アラビヤのワッハーブともよばれ、創始者は十八世紀のアラビヤの宗教改革者マホメット・ワッハブ（Mohammed Wahab）である。この信奉者はコーラン（Koran）とマホメットの言行録（Sunna）以外のものを説くものを不信行為とする復古主義者である。

（学校法人大阪女子学園理事長・学園長）